



# 共通教育通信

KYOTO UNIVERSITY

vol.7  
2006 AUTUMN



## 巻頭言

## 自由に考える

文||機構長 西田 吾郎

研究施設紹介  
霊長類研究所

文||霊長類研究所長 松沢 哲郎

## 授業紹介

## 「探究型化学実験―湖と海の化学調査―」

文||地球環境学堂 教授 杉山 雅人

## サークル紹介

## 点訳サークル・奇術研究会

空手道部・少林寺拳法部

## 「国際交流科目

若い時代に世界を学ぼう  
世界を見よう」

文||国際交流センター 教授 森純一

吉田南総合館等の改修工事に伴う  
通行規制について

## 「人文研アカデミー 身体論のすすめ」

文||人文科学研究所助手 菊地 暁・久保 昭博・藤原 辰史

## 木々考察

↳生ける化石メタセコイア

## 京大生とスポーツ実習

文||スポーツ実習アンケート調査より  
教授 小田 伸午

## 制度によらない教育

文||副機構長 高橋 由典

## 巻頭言

## 自由に考える

高等教育研究開発推進機構長

## 西田 吾郎

最近、フェルマー予想の証明についての解説本や、小川洋子氏の「博士の愛した数式」あるいは藤原正彦氏の著作などにより、数学者の世界が一般の人の目に触れる機会が増えてきた。そのことは結構なことであるが、いろんな人たちの集まりで、「お仕事は何ですか」と聞かれると一瞬困惑する。大学の教師です、というまではよいのだが、「ご専門は？」

と聞かれて数学です、と答えると相手の表情が微妙に変化するのがわかるのである。数学の研究を職業とするというのは一体どういうことなのか見当もつかなくて、どう反応してよいのか分からないのであろう。普通、「お仕事は」と聞かれて、医者です、あるいは営業の仕事ですと云ったり、あるいは、

内容の難しさに云えば大差ない物理学や制御工学をやっています、という場合でも、人はそれほど違和感を持たない。数学の研究を職業とすることが、何故そのように奇妙なものに感じられるのであろうか。おそらくそれは、他の研究職に比べ、自然現象を含めた現実の世界と数学の世界との繋がりが



副学長・高等教育研究開発推進機構構長  
大学院理学研究科 教授  
西田吾郎(にしだ ごろう)

1943年生まれ  
専門は位相幾何学 趣味はへぼ碁

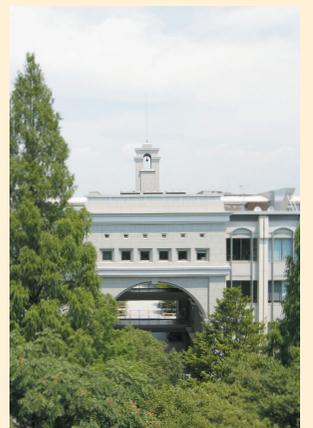
が見えにくいからであろう。

実を云うとこのことは、我々数学者自身もよく分かっているのかもしれない。多くの数学者は、数学が自然科学において果たしてきた役割を強調する。数学は自然科学の言語であり、例えば今日の電子機器の多くの機能は量子力学の賜物であるが、数学的記述を抜きにした量子力学はそもそも考えることすらできない。しかし、このように利用される数学は半世紀、あるいは二世紀も前の数学なのである。近年、暗号理論に整数論がよく用いられる。このような整数論は19世紀に完成されており、これらの理論を作ったガウスからクロネッカーにいたる数学者たちも、今日このような形で応用されるとは夢にも思わなかったであろう。現在の数学者たちが最先端の研究を行うときも、19世紀の数学者たちと基本的には同じ態度である。誤解を恐れずに云えば、応用に関しては「我関せず」であり、面白いから研究している、というのが実感である。それが職業ですか？と聞かれると答えに詰まるのもやむを得ないかも知れない。

数学の教育の現場でも似たような問題がある。中学、高校で生徒が数学を嫌になる原因は、それが難しいとか、繰り返しドリル問題を解かされるとか云うことと同時に、なぜ数学を勉強しなければならないかを誰もきちんと教えてくれないからである。受験勉強という現実を別にすれば、数学の勉強と現実の世界を結びつけるものを見つめることは難しい。二次方程式の解の公式

と高校卒業後の自分の人生とは何の繋がりもなかった、という著名な女流作家の発言も、事実としてはその通りかもしれない。大学においても、理系の基礎科目としての数学は別にしても、教養科目としての数学の位置づけは難しい。高校と違って受験という圧力がないだけに、自発的な学習意欲が必要となる。

数学は何のためにあるのか、という素朴な疑問に正面から答えることはけっこう難しい。ここでは視点を逆にしてみよう。数学は現実の世界との繋がりが希薄であると云ってきたが、裏返して云えば現実の世界に束縛されないと云うこともできる。物理学などの自然科学はどのように美しい理論であっても、自然現象を説明できなければ無価値である。数学はその意味で自由であり、また自由な発想が可能であることが数学の生命である。さきほどの整数論のように、数学者の何者にもとられない自由な発想によって得られた結果だからこそ、後になって思いもよらぬ応用が得られたりする。大学の理系の学生が学ぶ技術的な数学であっても、自由な数学的思考の伴わないものであれば、マニュアルに従って一定の答えを出すコンピューターと変わるところがないであろう。大学で数学を専攻した学生に企業などが求めるものは、数学の個々の専門的知識と云うより数学で培われた自由かつ柔軟な考え方であり、実際にもいくつもの企業の現場で技術的な行き詰まりを解決し、良い学生を紹介していただいたと喜ばれる例も多くある。



しかし、ここから私が云いたいことなのであるが、自由に考えるということは実は容易なことではない。自然現象を含む現実の世界に制約されないと云っても、論理を無視するわけにはいかないし、一人よがりの考えではもの役に立たないであろう。また、「考える」というのは自分が考えるのであって、他人に代わってもらうことはできない。自分が理解し納得できること以外を「考える」というのはありえないことである。最近の学生諸君の中には、教科書などに書かれていることを丸ごと信じてすましているように見受けられることがある。教科書であっても、ときに間違いや不適切な説明もあり、そういった場合に自分の創意工夫をこらして読むということが自由に考えるための良い訓練になるのである。権威に無批判に従ってしまうというのは、自由に考えるということの対極にある。京都大学の「自由の学風」あるいは「自学自習」という教育理念は同じことを謳っているのであるが、自由に考えるという姿勢を身に付けることができればそれは諸君の一生の宝になるであろう。

# 探究型化学実験—湖と海の化学調査—

地球環境学堂 教授 杉山雅人

授業  
紹介

1

## ■ フィールドワークはおもしろい

フィールドワークはおもしろい。たとえ同じ場所であっても訪れる時季々々々によってそれはさまざまに異なる様相を見せてくれる。水や大地に触れながら調査をしていると、まさに自然を科学しているのだと実感させられる。

昨年度から夏季集中授業として「探究型化学実験—湖と海の化学調査—」を開講しました。今年度は化学の広い領域に渡って種々の基礎的実験を行う科目、「基礎化学実験」が新たにスタートしました。「探究型化学実験」の開講はこれと連動してのもので、大学化学の基礎実験から更に進んだ段階での少人数による高度基礎化学実験を通して、より高いレベルの知識と技術を習得することを目指しています。

この授業はその副題から分かるように、室内での実験だけでなく、湖や海で行う野外の調査、いわゆるフィールドワークを伴うものです。この点で通常の化学実験とはずいぶん異なった内容となっています。京都大学は古くからフィールドワークに基づいた研究を活発に行ってきました。このため「探検大学」ともささやかれています。この授業では、湖や海の化学研究に関わる高い知識と技術に触れるとともに、実験室の外、野外での調査を通して、フィールドワークの楽しさと難しさを知ってもらいたいと思っています。

今年の授業は9月12日から23日にかけて、中に3日の休みをはさみながら、次のような日程で行いました。

- 12～13日 講義と予備講習
- 14～15日 琵琶湖の調査と湖水の分析

19～23日 田辺湾の調査と湖水・海水の分析、磯観察  
化学の実験をしたことはあっても、野外調査は全然経験がないという人が殆どでしょ

う。そうした人には、屋外での作業など全く想像もつかないかもしれません。例えば、湖水や海水はどうやって採取するのでしょうか？湖や海の表面水ならバケツを使えばよいでしょうが、水深が数十m、数百mにある水を汲むにはどうすればよいのでしょうか。まさか、湖や海に潜るといふ訳にもいきません。深いところにある水採取するにはやはり特別の器具が必要です。それがどんなものなのか、どうやって使うのか、授業はまずその説明から始まります。

調査では水温、透明度、pH、クロロフィル量、化学的酸素要求量、金属元素濃度、溶存酸素濃度、塩分量などさまざまな指標を測定します。湖や海の世界を考えるには、多面的にそれを眺めることが必要だからです。測定指標の中には、船上で測るものもあれば、採取した試料を実験室に持ち帰って測定するものもあります。水温のように簡単に測れるものもあれば、クロロフィルのように測る前に試料処理が必要で、これまでには多分見たことのない測定装置を使うものもあります。pHのように既によく知っているものもあれば、化学的酸素要求量のように名前を聞いたことはあっても十分には内容を知らないものもあるでしょう。調査をうまく進めるには、それぞれの指標について、その値が意味するところ、値の変動要因、測定の方法と操作法を正しく理解しておくことが必要です。これらの解説の後、調査を始めます。

## ■ 琵琶湖での調査

琵琶湖での調査には生態学研究センターの協力を得ます。同センターの研究調査船「はす」に乗って湖に出ます(写真1)。まずは北湖和瀬沖の深さ約50mの地点に向かいます(注)。水深別の調査を行うのです。クロロフィル量や化学的酸素要求量を測定する試料を採取



1



2

するとともに、船上でpHや水温、透明度を測ります(写真2)。夏の琵琶湖表層の水温は30℃を超えることもあります。水深50mの湖底付近の水はとても冷たく、7～8℃の温度です。これは日射の増大による水温上昇は表層に限られ、湖底には冬に作られた冷たくて重い水が沈んだままになっているからです。これを湖水の成層と呼びます。湖水の成層に伴って、表層と湖底では化学的・生物学的状態に違いが生じます。表層では生物生産が高まって、クロロフィル量が増加し、pHも高くなります。湖底では溶存酸素濃度の減少が起こります。こうした違いを湖水を分析することによって確かめてみましょう。表層と湖底の水の違いを体感してみても下さい。50mを超える深さから上がった水に手を浸けると、その冷たさがよく分かります。

北湖から南湖に向けて場所を変えながら調査を続けます。今度は水域による環境の違いを調べるのです。北湖と南湖の違いは目で見て明らかです。水の色の変化に注意しましょう。



地球環境学堂 教授  
杉山雅人(すぎやま まさひと)

岡山県津山市生まれ。専門は水圏化学、分析化学。日本、ロシア、中国の湖や河川の比較研究を進めています。



3



4



5



6

田辺湾の調査は、和歌山県白浜町にあるフィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所に滞在して行います。実験所の調査船「ヤンチナ」に乗ります(写真3)。

湖と違って海はうねりがあるので、少し船酔いするかもしれませんが、それも経験です。この調査では溶存酸素や塩分量の測定を主にしています。もちろん、水温、pH、透明度も調べます。湾口から湾奥に向けていろいろな水域で調査をします。地点による水質の違い、河川水流入の影響を調べます。湖と海の違いについても考えてみましょう。

ここでも野外調査の次は、実験室での試料の分析です。琵琶湖湖水の化学的酸素要求量の測定もこのとき行います。測定法は、高校の化学実験でもよく行われる滴定法です。これはとても簡単な方法ですが、湖水や海水の標準的分析法の一つでもあります。ピュレットを自分で操作して、測ってみましょう(写真4)。

こうして行った湖と海での野外調査と実験室での化学分析の結果から、琵琶湖や田辺湾の環境について考えます。あの場所のあの水深で溶存酸素濃度が高かったのはなぜか、クロロフィル量は透明度はどんな関係にあるのか、テール量は自由です。調査結果からどんなことが言えるのか頭を捻ってみてください。ひよつとしたら、思いもかけない発見があるかもしれません。

田辺湾の調査では、海洋生物に関する実習も行います。実験所の先生と一緒に、周辺の磯に棲息する生物の観察(写真5)や隣接する京都大学水族館の見学をします。通常なら見ることでできない水槽の裏側にも行ってみます。めつたにない機会です。水族館での展示がどのようになされているのを見て下さい。磯にはさまざまな生物がいます。全く見たこともないものに出くわすかもしれません。少しの間、化学から離れて、生物の世界に触れてみましょう。

瀬戸臨海実験所での授業は、同実験所の宿泊施設に四泊五日で滞在してのもので、

化学を含め数多くの研究分野でフィールドワークが行われています。それは生物科学や地球科学などの自然科学の領域から、文化人類学や地理学といった文系の学問にまで及んでいます。研究の対象も自然の湖や海、山といったものから人間の住む村や街までさまざまです。この授業は水域を調査フィールドにした化学の実験ですが、ゆくゆくは他の領域とも連携して、多領域からなる総合的なフィールド実習が開講できればと思っています。

### 田辺湾での調査

(注) 琵琶湖は堅田と守山を結ぶ琵琶湖大橋を境に深く大きい北湖と浅くて小さい南湖に分けられます。湖沼学的には北湖は中栄養の、南湖は富栄養の湖に分類されます。

湖での調査を終えたら、採取した試料の分析です。水をろ過して得た懸濁粒子からクロロフィルを抽出して、その量を測ります。ろ液はカルシウムなどの濃度測定に用います。使用する分光光度計や原子吸光分析計を自分の手で動かしてみましよう。

### 総合的なフィールド実習を目指して

三食を共にしながら行います(写真6)。昼や晩の食事は仕出弁当や近くの食堂でとりますが、朝食は交替で作ります。寝るのは大人数の相部屋です。クラブの合宿のようでもありますが、研究のために船に何日間も寝泊まりして調査をすることもあるので、その体験実習だと思って下さい。試料の分析が長引けば夜も実験しますが、基本的には夕方からは自由時間です。白浜は風光明媚な温泉地ですから、周りを散歩したり、近くの温泉で調査の汗を流すのも良いでしょう。授業に参加した仲間や教員と駄弁るのも面白いでしょう。こういったことも、この授業の一つの楽しみ方かもしれません。

# 国際交流科目

若い時代に世界を学ぼう 世界を見よう

国際交流センター 教授 森 純一

——「同じ人間が生活している」という  
ごく当たり前の事実が気がつき、心理的な距離は  
行く前よりも縮まった気がします。」  
(Y君の経験談から)——

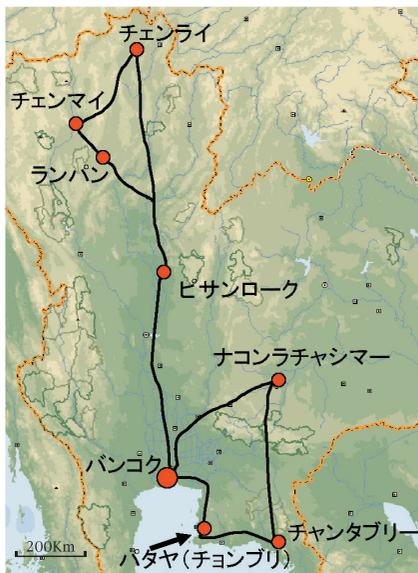
多くの学生諸君は世界中に出て行きたいと思っ  
ていて、将来、国際的な研究やビジネスで活躍して  
もらいたいと考えました。その結果、去年スタート  
したのが、国際交流科目です。

今年の3月、タイに行った学生はこんな感想を書きました。「東南アジアとい  
つても、「エビが来るんやな、鳥インフルエンザやばいなあ、日本めっちゃ木材輸入して  
るし…」とおほろげながらもついイメージし  
てました。今回実際に現地を見て、「同じ人間が生活している」というごく当たり  
前の事実が気がつき、心理的な距離は行く前よりも縮まった気が  
します。」(Y君の経験談から)

国際交流科目は、事前講義を受け、海外研修をして、レポートを書いて、単位の取得できる全学共通科目です。毎年、提供を希望する研究所や学部と

国際交流センターが協力して提供して  
います。昨年度は二つの科目が提供され、ひとつが上海、もうひとつはタイでの研  
修でした。

地図はタイのプログラムで、学生たちがどこを訪れたかです。3月の2週間を  
使って、タイの国を走り回っています。  
北のチェンマイでは高山の森を見て、南  
の海岸ではマングローブの森を見てい



タイの行程、北から南まで(タイ研修)

ます。引率されたのは、東南アジア研究所の山田勇教授と柳澤雅志助手の二人でした。山田先生は森林学を、柳澤先生は農村発展の研究をされています。全行程は2000キロにもなろうというハードスケジュールでした。参加した学生は1, 2年生を中心に6学部の14人の学生です。



国際交流センター 教授  
森 純一(もり じゅんいち)

1951年生まれ 出身 東京  
専門 国際交流 開発経済  
趣味 水彩画、デジタルなもの

「タイあるいは熱帯の森に関するさまざまな問題を学び、実際に目の当たりにすることができた点である。森林保護、環境と開発、貧困撲滅、省庁の縦割りを超えたロイヤルプロジェクト、JICAによる国際援助などについて広く学ぶことができた。(今ひとつは)タイという社会に身をおき、タイ人ときあひタイについて考えることが、タイを知り、ひるがえって、日本や自分自身を知ることにつながる」ということが十分理解できたと思う。これは、海外研修旅行における重要な意義のひとつである。」

国際交流科目に参加して来た学生達を見ていると、行く前と帰った後では、目の輝きが変わってくるのです。昨年の夏、二週間上海の復旦大学に行った学生もとても価値のある経験をしました。上海から長距離列車に乗って居合わせた地方の農民や学生達と筆談をしたのです。「汽車の中では英語と筆談が本場に役に立ちました。今回の研修では、中国語は話せるようになりたいと思ひ、英語はその必要性を十二分に感じさせられました。何とか意思疎通できることがあんなにもうれしく感じるとは思ってもいませんでした。」(上海研修参加のK君の感想から)



柳澤先生は今回の研修に二つの意味があったと書かれています。

「タイあるいは熱帯の森に関するさまざまな問題を学び、実際に目の当たりにすることができた点である。森林保護、環境と開発、貧困撲滅、省庁の縦割りを超えたロイヤルプロジェクト、JICAによる国際援助などについて広く学ぶことができた。(今ひとつは)タイという社会に身をおき、タイ人ときあひタイについて考えることが、タイを知り、ひるがえって、日本や自分自身を知ることにつながる」ということが十分理解できたと思う。これは、海外研修旅行における重要な意義のひとつである。」

上海に行った学生達から既に交換留学で海外へ行く人や、中国語の勉強に中国留学を計画する人が出てきていますし、タイ参加者には夏季休暇にバンコックに再び出掛けて行く人もいます。それまで行ったこともなかった国の人々が大好きになってしまふようです。タイや、中国の学生とその後もお付き合いが続いているようです。

京都大学には海外通の先生が多くおられます。それも最先端の研究をしている先生たちです。その先生方がそれぞれに工夫されながら、学生を海外に連れて行かれる国際交流科目は、先生と一緒に海外研修をし、地元の学生や人々と交流できる面白いプログラムです。国際交流センターでは留学生課の方々と一緒に、引率される先生方のお手伝いをしながら、国際交流科目の運営をしています。今年の夏は、ベトナム、上海、韓国への派遣が予定されております。来年はどこになるでしょうか。ぜひあなたも参加を考えてみてください。きっとそれだけの価値があると思います。



農家での聞き取り調査(上海研修)



マングローブの森を裸足で歩く(タイ研修)



セパタクロンを地元の人と楽しむ(タイ研修)

# 人文研アカデミー 身体論のすすめ

人文科学研究所 助手 菊地 暁 久保昭博 藤原辰史

## 「リレー」の本願

「人文研アカデミー：身体論のすすめ」は、人文科学研究所（人文研）の若手スタッフ、気だけは若いスタッフ（失礼）、学内・学外の愉快な仲間たちにより構成されたリレー講義である。この講義の特徴は、変幻自在な内容に負けず劣らず「リレー」という形式にある。そしてそのベースにあるのは、誤解を恐れずにいえば、昨今の大学教育に対する「疑問」である。

大学教育の存在理由とは何か？ そんな大問題をこの小文で語りつくせるはずもないが、さしあたりきわめて大雑把なイメージを述べるとすれば、主体的知性の創造―自ら問題を立て、データを収集し、論理を構築し、自分の頭で考え、自分の言葉で語ることできる知性―がその内容となることは大方の賛同を得られるかと思う。

では、昨今の大学教育、とりわけ本学の共通教育は、どこまでそれに適っているだろうか。個々の講義担当者の工夫と熱意が十二分に認められるべきことはもちろんだが、それとは別に、ある種の構造的デメリットが存在する気がしてならない。教育カリキュラムの「細分化」ないし「断片化」という問題である。現行の制度においては、一限から五限まで、月曜から金曜まで、半期で最大二五コマの登録が可能である。これは、何か一つのテーマを真剣に考えるというトレーニング―それ

は、文系理系を問わず、およそあらゆる学問的作業の出発点となるはずなのだが―を行う上で、いさゝか多すぎはしないだろうか。

もとより、大学とは「講義を聴く」ためだけの場所ではない。図書館にこもって本を読むことも、研究室にこもって実験することも、ゼミでディスカッションすることも、それぞれ大学という知的フィールドが可能にする学問的な営みである。講義もそのチャネルの一つに過ぎない。であるならば、講義の特性を踏まえた上でメリットを最大限活用する方策が模索されなくてはならない。

ここで数多の問題点の考察を省いて結論を述べると、それが「リレー」、「深まり」よりも「広がり」を志向する在り方である。限定された時間における多人数とのコミュニケーションにおいて特定の専門分野の知識を深めていくことは、不可能とはいわれないまでも困難ないし非効率的ではある。主題や方法が決まっているのなら、読書や実験のほうが個々の学習者の関心と能力にフィットした「深まり」をもたらすはずだ。講義のメリットは、むしろ、主題や方法が五里霧中な状況において、そこに方向性を産み出す「出会い」や「発見」や「予感」をもたらす（かもしれない）ところにある。「身体論のすすめ」が、分野も方法も異なる十数名の講師による「リレー」というスタイルを採用したのは、学問の「抱き合わせ販売」、知の「出会い系サイト」を標榜したからである。

## 「身体」というもんだい

「身体」という主題はここに浮上する。誰もが一つずつもつ、にもかかわらず、誰一人同じではない「身体」。このあまりに身近で、あまりに自明で、あまりに個別的な「身体」を、対象化し、言語化し、コミュニケーションするところが、学問の可能性を根源から鍛え直す格好の試金石となるのではないか。そんな夢想在「身体論のすすめ」につながった。誤解を恐れずにいえば、本講義の目的は、からだをかんがえること以上に、からだをかんがえること、からだだからかんがえることにある。

かくして二〇〇四年度、「身体論のすすめ」が開講された。講師陣が受講生にまじって聴講するという異様な光景のレクチャーだ。初年度は文学、音楽学、美術史、歴史学、人類学、民俗学、生命科学、情報学、科学史、等々を専門とする人文研スタッフにより、DNAから寄せて上げるブラジャーまで、多様なトピックをめぐる講義が繰り広げられた。あまりのごった煮ぶりに当惑した受講生も少なくなかったかと思われるが、それもまた意図するところだ。なお、この講義内容は、菊地暁編「京大人気講義シリーズ：身体論のすすめ」『丸善 二〇〇五』にまとめられている。御関心の向きにはぜひとも手にとっていたいただきたい。

二〇〇五年度は、学内学外のゲスト講師をお招きし、「何でもアリ」度はさらにパワーアップした。なかでも秀逸だったのはダンス



創作人「花沙」さんをお招きして創作舞踏226教室だんすを踊ってもらった時である。前フリぬき。いきなり教室に登場し、無言で踊り始める。シニールなパフォーマンスに度肝を抜かれた受講生も少なくなかったようだ。これに限らず、「身体」という切り口を共有してもらうこと以外は、概ね各講師の裁量にお任せしている。歌っても踊っても体探してもオッケー。何が飛び出すか分からないドキドキ感を講師陣も共有しつつ、スリリングな「リレー」が続けられているのだ。

## 「あいだ」と「かたち」

二〇〇六年度からはサブテーマを導入した。前期は、身体と身体の「あいだ」というテーマを設定した。磁石のように、ひきつけられたり、ひき離されたりする身体。言葉にしがたい力が働く「あいだ」から身体を再考することが目的である。「指揮者と演奏者」「ナチストとユダヤ人」「男と女」という二項図式をとりあげる講師、「身体間」の媒体としての少女漫画、インターネット、世界市場を論ずる講師、さらには中国思想、文学表現、身体表現にみられる「あいだ」論を紹介する講師など、「何でもアリ」度は、もはやオーガナイザーでさえ止められない状態に突入した。だが、こうしたカオス状態がかえって受講生の積極性を誘発したこともまた事実だ。

このリレー講義では、授業後にレポートを提出してもらい、次週講師がそれに対してコメントするのだが、これが面白い。たとえば、小説における作者と読者の問題を論じた文学理論の専門家に對し、ある受講生は自作の短編小説を書いて講師をうならせた。また、ナシヨナリズムを「彼岸へ飛ぶ」という宗教学的視点から論じた文化人類学者へのレポ

ートで、昔NHK教育テレビで放映されていた「ニコニコぶん」という子ども番組に登場する「ピッコロ」の所作と言説を、細部に至るまで報告し、講師を驚かせた。こうしたユニークなレポートを読んでいると、講師と受講生の「あいだ」から「大学教育」の新しいかたちが生えつつある、と思わずにはいられないのである。

後期は「かたち」をテーマとする予定である。

身体の「かたち」にわたしたちが示す異常なまでの敏感さは、あらためて言うまでもない。エステティックサロンに通い、あるいは整形手術をほどこしてまでその「美」を追求する人々もいれば、また単なる脂肪の多寡、骨格の偶然的な組み合わせによって出来上がる微妙な形象―腰のくびれやらあごのラインやら―を取り出してフェティシズムの対象とする人々もいる。逆に「異形」の者はしばしば差別や排除の対象となってきた。そこまでゆかずとも人相によって性格を推定し、対人関係を築く上での一助とすることは稀ではない。

だがこうした外面的な形態よりも複雑なのは、直接的な表象を拒む身体の「かたち」だろう。たとえばスポーツや舞台芸術において身体がつくる「型」は、言語や図像による表現のみでは伝達しきれない。運動選手や役者の「スタイル」を説明するために、比喩的な表現に頼ることが多いのはこの証拠だ。あるいはおもかげ。それは直感的に感得できるが説明するのは非常に困難な、ふたつの形姿の間の類似である。

形、象、型、姿、様、相……身体の「かたち」には様々な側面があり、わたしたちの思考と想像力に様々な働きかけている。それを考察するのが今回のリレー講義の目的である。

「身体論のすすめ」は変化し続けるリレー講義である。どこにたどり着くのか、一向に分からない。そして、本当の意味での学問的知性とは、そうしたアトランダムな状況に動じないタフな知的好奇心を必要とするものだ、と思う。そんなタフな越境的知性のパトルフィールド「身体論のすすめ」に、我こそはと思う人はぜひトライしてみてほしい。オーバーエイジも歓迎。



人文科学研究所 助手  
菊地 暁(きくち あきら)【写真右】

1969年 北海道生まれ  
専門は民俗学、著書「柳田国男と民俗学の近代」  
(吉川弘文館 2001)

人文科学研究所 助手  
久保昭博(くぼ あきひろ)【写真中】

1973年 千葉県生まれ、専門は仏文学・文学理論  
訳書(共訳)ミシェル・ウイック「知識人の世紀」  
(紀伊国屋書店、近刊)

人文科学研究所 助手  
藤原辰史(ふじはら たつし)【写真左】

1976年 北海道生まれの島根県育ち、専門は農業史  
著書「ナチス・ドイツの有機農業」(柏書房 2005)

写真について：株式会社七彩にて。後期はマネキン製作スタッフをお招きして、身体のかたちについてお話をうかがう予定。

## はじめに

スポーツ実習(体育実技)に関する全学的なアンケート調査「スポーツ実習に関するアンケート」が昨年の10月に行われた。平成3年(1991年)の大学設置基準の大綱化以前では、保健体育科目は保健体育講義と体育実技が開講されていた。このときまでは、1回生と2回生が必修(講義2単位、実技2単位)で保健体育科目を履修していた。しかし、大綱化により、教養科目はA、B、C、D群(保健体育科目に呼称変更され、平成5年より、体育実技がスポーツ実習に変更され、単位数もそれまでの倍にカウントされるようになった。スポーツ実習は、D群として扱われるようになった。

医学部と薬学部は、平成5年より、農学部も平成7年より、スポーツ実習を卒業単位としてカウントしないことを決めた(医学部医学科では、平成18年度より、D群科目として登録した場合にも、2単位までA群として卒業単位に認定されることに変更された)。

このような状況のなかで、スポーツ実習が京都大学でどのような位置づけにあり、何を目的として、その目的を果たすには、何をどのように実施すればいいのか、全学的に検討すべき時期に来ているものと考え、今回、スポーツ実習に関するアンケートを行った。

## 京大生は意外とスポーツ好き

行ったアンケートは、二種類である。すなわち、スポーツ実習を卒業単位に認めている7学部生(総人、文、教、法、経、理、工)に対して行うものと、スポーツ実習を卒業単位に認めない3学部生(医、薬、農)に対して行うもの二種類である。前者については731名、後者については853名の回答を得た。3学部のアンケート

トでは、1回生は約74%という高い回収率を示し、2回生は53.6%と半数以上の回収率を示した。ご協力頂いた学生の皆様、事務員の皆様にはこの場を借りて御礼申し上げます。

本調査によつて、京大生は意外にスポーツ好きの学生が多く、過半数の学生はスポーツ実習に対して満足しており、スポーツ実習を履修する理由は、楽しいから、身体の健康によいから、心の健康によいから、友人ができて友人との交流が楽しいから、スポーツの技能や技術を身につけたいから、ということがわかった。ただし、アンケートの結果、現在のスポーツ実習については、開講種目の拡大、授業内容、設備充実などの点で改善の余地がみられたので、改善に向けて努力してゆきたい(図1,2,3を参照)。

図1 スポーツ実習は好きですか？

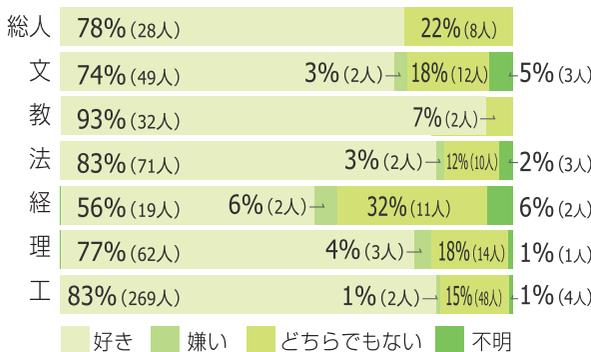


図3 スポーツ実習に満足していますか？

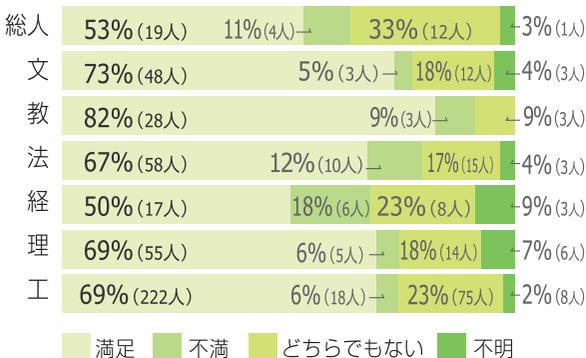
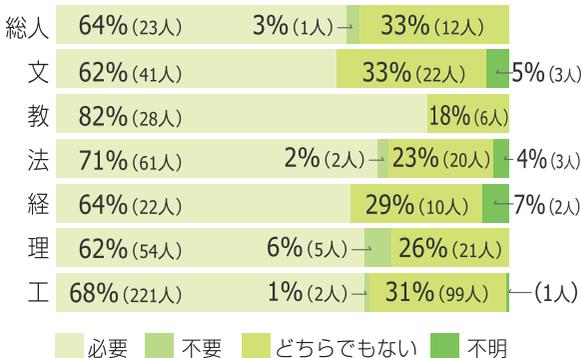


図2 大学の授業の中でスポーツ実習は必要だと思いますか？



医学部(保健学科)、薬学部、農学部がスポーツ実習を卒業単位に認めていないことに対しては、今回、当該学部の大半の学生は、単位が認定されれば履修したいと考えていることが明らかになった(図4)。ただし、スポーツ実習は、必修ではなく、学生の意志を尊重して、選択の自由を残した上で、スポーツ実習を卒業単位に認定できるような方向性を望んでいる学生が大半であることも確認できた。

### コミュニケーション能力の獲得も

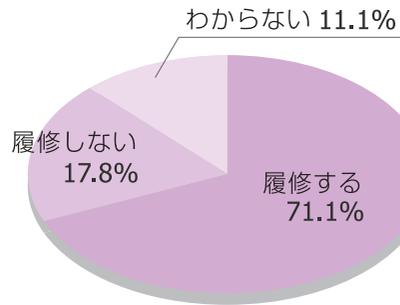
薬学部のある教授から、以下のような要望をお聞きした。「理系学部の先生方はとくに学生に望むのは、まず第一に研究能力であろうから、そのことを踏まえて京大独自のスポーツ実習の目的を打ち立て、京大独自のスポーツ実習のあり方を模索して欲しい。研究を推進するうえで重要なのは個人間のコミュニケーション能力で、これが欠落していると、個人の能力は優れていても、思うように研究成果が出なかったり、他人のアイデアに関心を持ったり、他人に質問することができないことがあります。ぜひ、スポーツ実習で体力、健康面だけでなく、人と人が関わる能力も身につけられるような工夫をして、そのこと自体も教養教育としてのスポーツ実習の目的に挙げて、研究大学を標榜する京都大学にふさわしいスポーツ実習をやっていただきたい」。

スポーツ実習の目的として、平成18年度全学共通科目履修の手引き79ページに、社会的交流技能を養成することが掲げられている。スポーツ動作の技能の向上と、体力・健康作りに寄与するスポーツ実習の意義はもちろんであるが、今後、集団の中のコミュニケーション能力の獲得といった社会・心理性からみたスポーツ実習の意義についても検討してゆきたいと考えている。

### スポーツ実習に関するアンケート

<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/pdf/link/link0247.pdf>

図4 スポーツ実習が卒業に必要な単位として認定されれば履修しますか？



高等教育研究開発推進センター 教授  
小田伸午(おだ しんご)  
専門は運動科学 趣味は常足(なみあし)

1954年、愛知県生まれ。人間の身体運動やスポーツに関する運動制御機構を心理、生理、物理の各方面から総合的に研究している。

近年、全学共通科目「運動科学」のなかで、「二輪動作」というスポーツにおける新たなからだの動かし方を発表し、学内外の注目を浴びている。主な著書に「身体運動における右と左」(京都大学学術出版会)、「運動科学」(丸善)、「スポーツ選手なら知っておきたい「からだ」のこと」(大修館書店)などがある。



# 霊長類研究所

霊長類研究所長 松沢哲郎

日本の霊長類研究は野生ニホンザルのフィールドワークから始まりました。民間からの支援でできた財団法人・日本モンキーセンターがその研究拠点でした。戦後まもなく始まり、およそ20年間に及ぶ初期の研究の蓄積のもとに日本学術会議から政府への勧告によって霊長類研究所ができました。その際日本モンキーセンターとの協力を視野に入れて、そ

の隣地に研究所が建てられたのです。霊長類研究所には霊長類に関する学術研究を総合的に推進し、人間の本性とその進化的基盤を明らかにすることを目的として現在4つの研究部門（10分野）が設置されています。進化系統研究部門（形態進化的分野、集団遺伝分野、系統発生分野、社会生態研究部門（生態機構分野、社会構造分野）、行動神経研究部門（思考言語分野、認知学習分野、行動発現分野、分子生理研究部門（器官調節分野、遺伝子情報分野）です。そのほかに、時限の研究部門として、流動部門（多様性保全研究分野）と寄附研究部門（比較認知発達研究部門、平成18年10月発足予定）があります。

さらに2つの附属研究施設があります。人類進化モデル研究センターとニホンザル野外観察施設です。前者は研究所に在る17種類750個体ほどのサル類の繁殖と飼育を担当しつつ、研究用サル類の育成と健康・福祉に関する研究を担っています。後者は野生ニホンザルの研究と野生生物保全を担当しており、宮崎県の幸島の対岸に観察所をもっています。「芋洗い」で知られた幸島のサルたちについて、53年間に及ぶ長期継続観察がおこなわれています。この他にも世界自然遺産に指定され唯一の亜種ヤクシマザルがすむ屋久島や、北限のサル生息地である下北半島な

の隣地に研究所が建てられたのです。霊長類研究所には霊長類に関する学術研究を総合的に推進し、人間の本性とその進化的基盤を明らかにすることを目的として現在4つの研究部門（10分野）が設置されています。進化系統研究部門（形態進化的分野、集団遺伝分野、系統発生分野、社会生態研究部門（生態機構分野、社会構造分野）、行動神経研究部門（思考言語分野、認知学習分野、行動発現分野、分子生理研究部門（器官調節分野、遺伝子情報分野）です。そのほかに、時限の研究部門として、流動部門（多様性保全研究分野）と寄附研究部門（比較認知発達研究部門、平成18年10月発足予定）があります。



枝を使いハチミツをとるチンパンジー（生態機構分野）



病気のサルを治療する（人類進化モデル研究センター）



数字の順序を学習する「アユム」（思考言語分野）



霊長類研究所長・教授  
松沢哲郎(まつざわ てつろう)

チンパンジーを対象とした認知実験とアフリカでのフィールドワークをおこなっている。人間の心の進化的基盤を探る「比較認知科学」という研究領域を確立した。著書に「進化の隣人ヒトとチンパンジー」(岩波書店)など。紫綬褒章など受章。



寄り添って寒さをしのぐニホンザル  
(社会構造分野)



ミャンマーでの化石調査  
(系統発生分野)



野外生態実習



幸島(ニホンザル野外観察施設)

他にも野外調査の基地となる施設をもっています。  
また、平成17年度から研究所の現在地から東に15kmほど離れた里山に第2キャンパスの整備を始めました。より豊かな自然環境のもとでサル類を飼育し多様な研究を展開する「リサーチ・リソース・ステーション」(略称RRS)と呼ばれる事業です。貴重な研究資源としてのニホンザルを自家繁殖して全国的な利用に供するプロジェクトを進めています。  
霊長類研究所には約40名の教員が所属しています。研究の推進とともに大学院教育を担っています。理学研究科生物科学専攻の霊長類学系として入試をおこなっています。修士課程の入学試験は8月に、博士課程への編入試験は3月初めころにおこなわれます。現在大学院生は42名が在学しています。大学院生やポスドクの約20%近くが外国人です。国籍別にみると8か国に及びます。外国人研究者の来訪も多く、活発な国際交流をおこなっています。

霊長類研究は分子から生態まで多様な研究がありますが、実験室と野外の研究に大別されます。野外では化石の発掘調査や、野生霊長類の生態、行動、形態、遺伝などの解析を通して進化ならびに生物地理学的研究をしています。そのため野外調査の基地がアメリカのケニアやタンザニア、ウガンダ、ギニア、東南アジアのミャンマーやマレーシア、インドネシアなど世界各地にあります。その研究活動は国際的にも高い評価を受けており、21世紀COEプログラム、日本学術振興会先端研究拠点事業H O P E など大型の研究プロジェクトにも取り組んでいます。  
21世紀COEプログラム「生物多様性研究の統合のための拠点形成」は、理学研究科内の3つの系(動物学系、植物学系、生物物理学系)と生態学研究センター、霊長類研究所という3部署の共同プロジェクトです。京都大学の伝統である野外の生物学研究と発展の著しい分子生物学とを統合し、世界的な研究・教育の拠点形成をめざしています。  
H O P E 事業は、日本学術振興会(JSPS)の先端研究拠点事業「人間の進化の霊長類的起源」です。英文名の頭文字をとってH O P E と呼んでいます。日本の京大霊長類研究所、ドイツのマックスプランク進化人類学研究所、イギリスのケンブリッジ大学、イタリアの認知科学工学研究所、アメリカのハーバード大学をそれぞれ拠点研究機関として、ヒトを含めた霊長類を対象に心と体と社会、その基盤にあるゲノムについて研究交流を推進しています。

広報活動としては大学院をめざす全国の学生を対象として、オーブンキャンパス(大学院ガイダンス)を毎年2月に実施しています。また一般の方々を対象として、犬山公開講座(8月)、東京公開講座(9月)、および市民公開日(10月)を実施しています。本部構内の京大総合博物館の入り口近くに霊長類研究の展示コーナーがありますので訪ねてみてください。また、研究所にもささやかですが展示資料室があつて、霊長類に関する理解を深めていただくための解説パネルや、化石人類のレプリカ、霊長類の骨格模型、野生チンパンジーの使った道具などを展示しています。  
京都大学での授業では全学共通科目として「霊長類学のすすめ」と「霊長類学の現在」があります。前者は毎年前期に京都でおこなわれる授業で、いわば入門編です。後者はこれまで犬山の研究所にきていただいた、集中合宿形式で9月に実施してきました。他に少人数ゼミナール(通称ポケゼミ)も開講しています。  
霊長類研究所のホームページでもさまざまな情報を公開しています。ぜひ訪ねてみてください。

## 空手道部



全国国公立大学空手道選手権大会



空手道とは、沖縄で発祥した日本古来の武道の一つで、主に拳足を用いた打撃技を特徴としています。戦後はスポーツ化が進み、国内だけでなくとどまらず世界各地に普及し、現在では競技人口が約4000万人だといわれています。2012年のロンドン五輪には採択されませんでした。近い将来、空手道がオリンピック競技になることは間違いないといえるでしょう。

「空手」と聞くと、暴力的なイメージを思い浮かべる人がいますが、決してそうではありません。礼を重んじ、心身を鍛え上げて人間形成に役立てるという目標は、他の武道と変わりません。

試合では、「組手」と「型」の2種類があります。組手では相手と対面してお互いに技(突きや蹴りなど)を出し合い、決まった技のポイントを競います。「K」などに見られる、いわゆるフルコンタクトとはルールが異なります。型では、各種の技を決まった順序で演舞し、その完成度を競います。

強くなりたい、空手の型を打つてみたい、理由は何であれ興味を持たれた方は、是非空手道部に足を運んでみて下さい。オールシーズンで部員を募集しています。場所は体育館第二武道場、練習時間は以下の通りです。お待ちしております。

練習時間  
 月・火・木・金 : 15:00~17:00  
 水 : 19:00~21:00  
 土 : 16:00~18:00

# サークル紹介

学生生活の大きな柱のひとつに、クラブ・サークル活動があります。京都大学には公認団体だけで、文化系が約100団体、体育系が約90団体もあります。すでにそれぞれの団体で活躍中の人も多いと思いますが、所属団体以外の活動は意外と知らないもの。ここで紹介する情報をきっかけに興味と交流を深め、活動の輪を広げていただければ幸いです。

## 点訳サークル



若々しい学生の声でにぎやかな本部構内とは対照的に、経済学部部の階段を下りると、そこには暗くひっそりと淀んだ空気が漂う。その中の「空」点訳やつてます」の看板がかかる部屋の中から、毎週月曜日、カタカタカタカタと不気味な音が聞こえてくる…。

一般の活字(墨字)を視覚障害者の方が読む点字に直す「点訳」が、私たち京大点訳サークルの基本的な活動です。私たちは普段、関西圏にお住まいの視覚障害者の方から依頼を受けた書類・マンガ・チラシ等を点訳しています。

点訳というと、「難しそう…」「そもそも点字自体『ピール缶の上の上の上のプツツしたやつ』ってことくらいしか知らないし…」と思われる方が大半でしょう。しかし、実際には、点字にも点訳にも一定のルール(文法)があり、意外と簡単に出来てしまうものなのです。道具も、逐一手で打っていた時代は終わりました。現在はパソコンの普及によって、ずいぶん効率化が進んでいます。

最初のころは「文字」文字確認しなくては打てなかった新入生も、だんだん速く打てるようになってきました。速く打てる、それに伴いじわじわと喜びも感じられてくるのです。

こんな(地味な)魅力溢れる点訳を、あなたもやってみませんか？



# 奇術研究会

私達奇術研究会は、マジックを楽しむサークルです。現在70名以上の会員が在籍し、毎週水・金曜日に吉田南4号館で練習をしています。

一口にマジックと言っても、その種類は様々です。私達は、一通りの基本を学んだ後、自分が選んだ演目を、主に上回生の指導のもと練習しています。

その最大の目標は11月祭で行うマジックショーです。4日間、ほぼ1日中演目・出演者を変えて繰り返し公演を行っています。毎年沢山のお客様にお越しいただき、ご好評をいただいております。

11月祭直前は、人によっては夜遅くまで練習をすることもあります。仲間や先輩にアドバイスをもらいながら少しずつよりよい演技にいきます。練習の結果、本番でお客様から拍手をいただいたときは、感動もひとしおです。

また、会員の仲も非常によいので、様々なコンパ・イベントを企画して遊んでいます。町内会や幼稚園からの依頼を受けて、学外でマジックを行うこともあります。さらに、プロマジシャンの方をお招きして、直接ご指導をいただくこともあります。

とにかく、手品をすること、見ることが大好きな人間の集団です。少しでも興味がありましたら、是非11月祭のマジックショーに足を運んでみて下さい。



## 少林寺拳法部

私たち少林寺拳法部は、体育会の中でも有数の部員数を誇る大所帯で、道場が割れんばかりの気合を響かせながら、心身を練磨すべく日々汗を流しています。部員のうちの大半が初心者で入部し、三段を取得して卒部します。

少林寺拳法の技には「剛法」と「柔法」という分類があります。「剛法」というのは突きや蹴り技のことで、これを練習すれば強くなれます。「柔法」というのは急所や関節を攻める技で、小柄な人や力の弱い人でも相手を倒すことができるようになります。

少林寺拳法の大会ではこの「剛法」と「柔法」を組み合わせた型「演武」を披露し、気迫、切れ、技の正確さなどの点数を競います。二人一組で行う組演武、6名から18名で行う団体演武、一人で行う単独演武といった種目があります。

練習内容としては、演武の他に、毎回基本の突き蹴りを行うことで技術の向上を図ります。さらに、実践的な練習としてミット蹴りや乱捕を行います。ミット蹴りは基本の蹴りの練習を実際にミットに蹴りこむことにより、より良い蹴りができるようにするための練習です。また、乱捕は普段習う技の繰り出すタイミングや、技と技の連絡を学ぶためのより実践的な練習です。

多種多様な技と練習方法があることが少林寺拳法の魅力であり、我々京大少林寺拳法部では各人が楽しみながら好きな分野を伸ばしていけることを重視しています。その結果、

例年、七帝戦をはじめ、京都の大会から全国の大大会まで、優秀な成績を取っています。

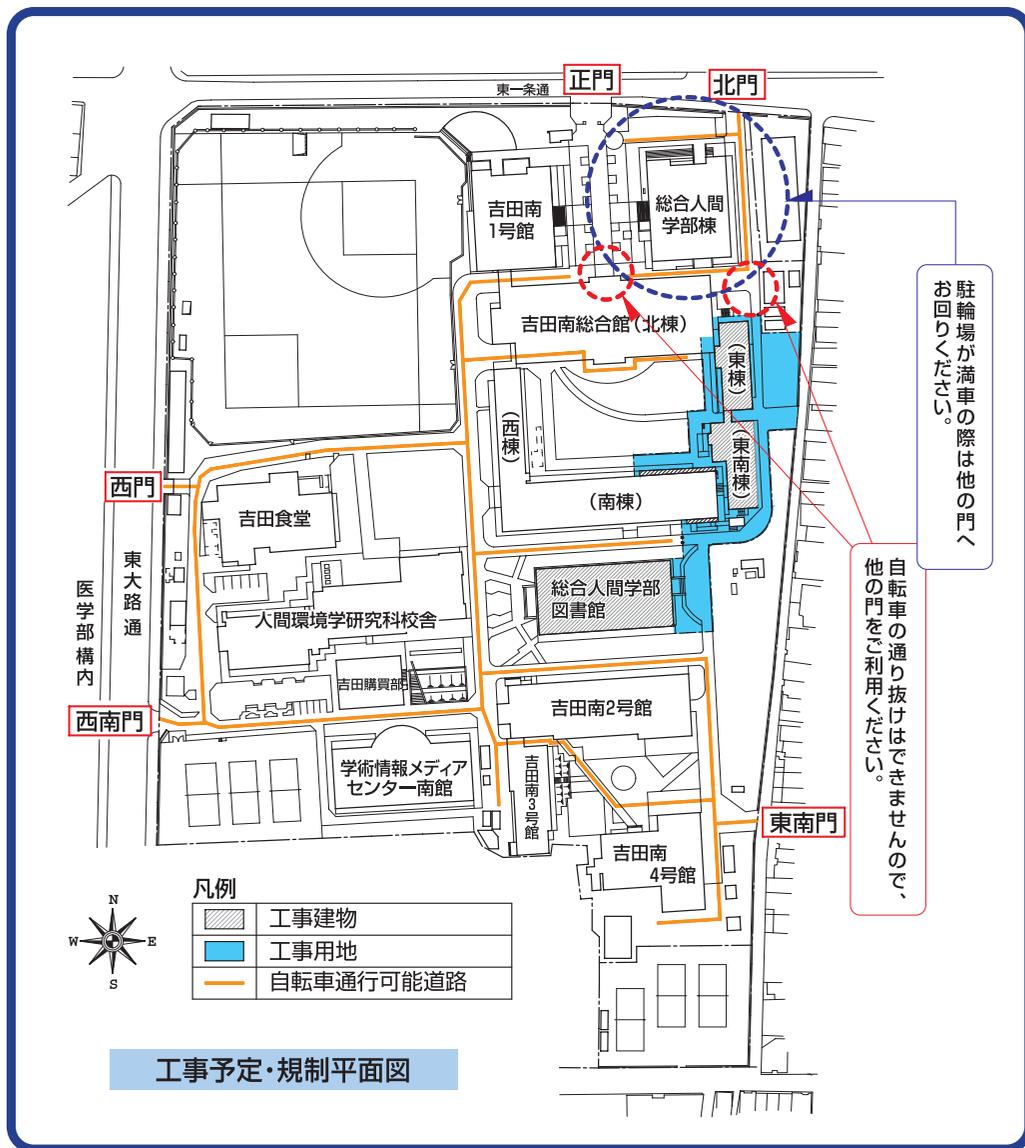
興味を持たれた方は是非、お気軽に道場まで足をお運び下さい。部員一同お待ちしております。



# 吉田南総合館等の改修工事に伴う 通行規制について



8月より年度末にかけて、吉田南総合館の東棟・東南棟・南棟と総合人間学部図書館の改修工事が行われます。今年の5月26日に公表された「京都大学耐震化推進方針等について」にもあるとおり、京都大学では建物の耐震性能の向上を施設整備の大きな柱に据えています。吉田南総合館の改修はその一環で、耐震性能の不足している東棟と南棟の一部に耐震補強を施します。東棟・東南棟においてはあわせて内装と外装の改修をおこない、教育環境の改善を図ります。工事期間中、皆様にご不便をおかけしますが、ご理解とご協力のほどよろしくお願いいたします。



## ● 通行規制について

工事にともなって、配置図に示した範囲は工事用地として囲われます。工事期間中、工事用地内には立ち入れませんのでご注意ください。北門から自転車で入られた場合、北棟以南には通り抜けできなくなりますので、南のほうへ行かれるときは他の門をご利用ください。また、他の門より北門へも自転車では通り抜けできませんのでご注意ください。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

## ● 工事の概要について

### 〈吉田南総合館東棟〉

耐震壁を設けて耐震性能の向上を図ります。合わせて内外装と設備の改修をおこないます。

### 〈吉田南総合館東南棟〉

内外装と設備の改修をおこないます。

### 〈吉田南総合館南棟〉

東側の一部外壁に耐震性向上のためのフレームを取り付けます。今回は内部の改修はおこないません。

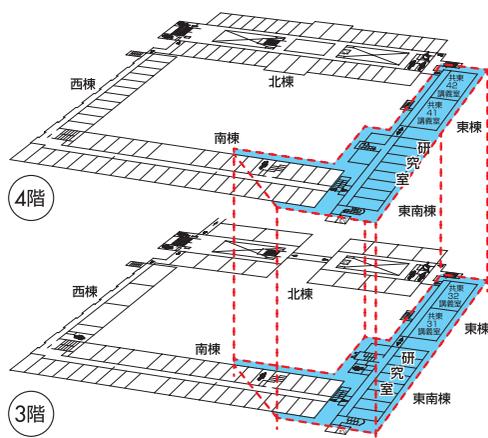
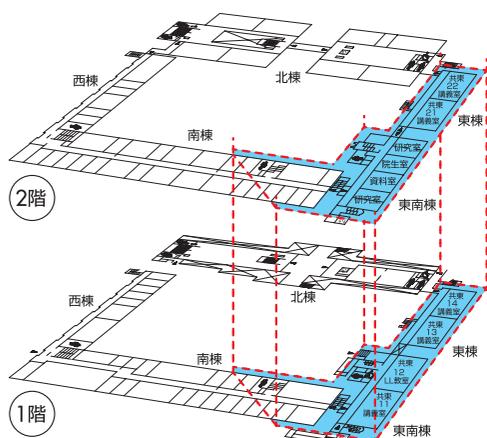
## ● 工程の概要 (変更することがありますので、予めご了承ください。)

	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
準備・調査	■								
東南棟改修		■	■	■					
東棟改修				■	■	■			
南棟改修		■	■	■	■				
図書館改修							■	■	■

### 吉田南総合館(改修後平面)

凡例

■ 改修範囲を示す





メタセコイア



## 木々考察 ～生ける化石メタセコイア～



グラウンド北西隅のメタセコイア

ここでは京大吉田南構内にある植物を取り上げ、少しばかり考察していきたいと思う。

「京都大学の樹木」といつて誰しもが思い浮かぶのが「クスノキ」であろうと思うが、今回ここで取り上げるのは残念ながらクスノキではない。吉田南構内には京都大学が誇るクスノキに勝るとも劣らない由緒正しき樹木があるのだ。

さて時は今から65年前の1941年。京大理学部植物学教室に居られた三木茂博士が、陶土の中に混じる化石植物を新種の植物として「メタセコイア」と命名し、学会に発表した。このメタセコイアは北米や中国から化石こそ見つかるが、生きているものが見つからないので、もはや絶滅した植物とされていた。しかし数年後、中国四川省の揚子江南側の支流である磨刀溪の奥地のごく限られた地域で現存しているメタセコイアが発見されたのだ。

ここで話はアメリカに移る。カリフォルニア大学の古生物学の権威チェニー博士は自ら中国におもむいてその自生地を踏査し、種子を採取して多数の苗木を育成した。1948年、チェニー博士は日本へメタセコイアの苗木第1号を送り、この苗は皇居の吹上御苑に植えられている。これとは別に、1950年に設立されたメタセコイア保存会に100本の苗木がチェニー博士から送られた。日本に送られた100本の苗のうち5本が京大に贈られ、3本が1950年に創設された宇治分校に植えられ、2本は理学部植物園に植えられた。3本のうち2本が1960年、宇治分校が吉田分校へ統合されたときに吉田へ移され、その1本は

# 制度によらない教育

副機構長 高橋 由典

グラウンド北西隅に、もう1本は当時の生物学教室の畑（現在の総合館南棟の中央部あたり）に植えられたが、後の改築に伴いグラウンド北西隅に移されている。弱り幹がいたんでいる方がそれである。

さて、吉田南総合館北棟のアーチを抜け、いざ中庭の少々鬱蒼とした木々に囲まれてみると、ひとときわ高く、そして美しい樹

形を見せてくれるのが、3本の生ける化石ことメタセコイアである。この3本の由来は、京大に贈られたメタセコイアの小枝のさし木によってふやされたもので、3本のうち西側の木は、かつての学園紛争の際、そのそばでたき火をされたために西南側が焼け、今でもその名残りで変形している。

三木博士によって名付けられたメタセコイアが、リレーのように中国、アメリカを渡って京都大学に届き、いまグラウンド北西隅で移り変わる吉田南構内を静かに見守りながら佇んでいる。

※参考文献  
京大教養部報No.112 1981年1月  
生きていた化石植物—メタセコイア— 奥田光郎

今から三十数年前の夏、学部四回生の私は卒業論文のテーマについて考えあぐねていた。ある日思い立ってそのころ教養部におられたある先生の研究室をお訪ねした。自分のアイデアを聞いてもらおうと思っただの。その先生とはほとんど一面識もなかったが、著書や論文を通じてその研究内容を存じ上げていたし、いたく興味を惹かれてもいた。その先生にお尋ねすれば、自分が後生大事にしてきたアイデアなるものとの価値がはつきりするのではないか。そんなことを期待していたのだと思う。夏の盛りの蒸し暑い日だった。そのときの緊張感は今でもはつきりと思い出すことができる。

いま教養部と書いた。少し解説しておこう。ほんの十数年前まで京大にも教養部という部局があった。どの学部の学生も入学後の二年間はそこで勉強し、三年次からそれぞれの学部に分かれ、専門の勉強をした。教養部の先生方は全学部の二回生までの教育を担当したが、教養部は学部ではないので（すなわちその部局に入学してくる学生はいないので）、固有の指導学生をもってはいなかった。

つまり私がお訪ねした先生は、少なくとも制度上は私といささかのつながりもなかった。私もそのことを承知していたので、必要以上に緊張していたのだと思う。「なぜ指導教授でもない私がコメントせねばならないのか」などと正面切って言われたらどうしよう、などと考えていたのだ。制度の指示に根拠をもたない行動をとろうとすれば、どうしても多少の緊張は強いられる。

私がつた類の行動は、当時かなり一般的だったのではないかと思う。教養部には魅力的な先生がおられたし、どことなく自由な雰囲気があった。それを好む学生も多くいた。つまり三十数年前には、学部ないし講座単位の制度上の教育と並行して、フォーマルにはその存在すら確認できない教育が教養部を中心に行われていたのだ。教養部という

仕組みは、ほぼ必然的にいま述べた意味での「制度によらない教育」を出してしまう。そしていうまでもなく、この「制度によらない教育」にはなかなか捨てがたい味がある。この教育は制度上の支えをもたない。となればその場を支えるのは、認識そのものの有意味性ということにならざるをえない。制度によらない教育の場とは、認識そのものの有意味性だけが厳しく問われる場なのだ。大学教育のエッセンスがむき出しになっている場といつてもよい。

今はむしろ教養部は存在しない。したがって教養部に関わる限りでの「制度によらない教育」の可能性は消失した。しかしながら「制度によらない教育」の可能性それ自体がなくなっただけではないだろう。それは制度非依存的な精神のあるところ、すなわち制度の指示より有意味な認識への関心が優越するところに、いつでもどこでも出現する。この種の教育すなわち「フォーマルにはその存在すら確認できない教育」こそが、大学全体の活気を示す真の指標なのではないか。

教養部に代わって現在では高等教育研究開発推進機構が全学共通教育の整備・改善に努めている。一般的に制度の整備が進めば進むほど、「制度によらない」という発想が出現しにくくなるのは事実だ。制度を整備するとは、「あらゆる必要が当該制度上で満たされるようにする」という努力にほかならないからだ。制度の整備は制度依存的な精神を生み出しがちなある。前段で述べた観点からいえば、こうした精神の蔓延は大学にとつては必ずしも喜ばしい事態とはいえない。

制度の合理的な整備・改善が大学にとって必須の要件であることは論を俟たない。問題は、制度の整備・改善が、制度依存的な精神ではなく制度非依存的な精神をいかにして生み出していかにあると思う。「フォーマルにはその存在すら確認できない教育」は現在いつたような形で存在しうるだろうか。このことは真剣に考えるに値する問題だと思う。

# スナップ写真大募集!!

キミの撮った写真が次号の表紙になるかも・・・

「共通教育通信」では、スナップ写真を使って表紙を制作しています。日常の何気ない風景、最近興味があるもの、友達とのスナップなど何でもかまいません。みなさんがカメラ付き携帯電話（デジタルカメラでも可）で撮影した写真を下記アドレスまでお送りください。

本誌に対するご意見、ご感想も同アドレスで受付けています。

京都大学共通教育推進部

E-mail: 730tsushin@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

なお、お送りいただいた写真すべてを掲載できない場合がありますのであらかじめご了承ください。

著作権や肖像権の問題により掲載できないものもあります。著作権の確認、人物を撮る場合には掲載の承諾をもらってからお送りください。



## 表紙の写真紹介



1. 北部構内
  - 2.3.4.5.8.10.12.18.19. 吉田南4号館前
  6. 本文P.11(写真1)のチンパンジー
  7. 吉田南構内プロムナード
  - 9.15. 吉田南構内吉田食堂横
  11. 法経本館前
  13. 吉田南構内メタセコイア
  14. 学生部前
  16. 共通教育推進部 M山さん手作りケーキ
  17. 共通教育推進部 Sさん作成のアレンジメント
- 表紙に関する写真撮影にご協力いただきありがとうございました。

原稿募集中! 「学生による授業紹介」への原稿を募集しています。

様式は自由ですが、文字数は科目名、担当教員名も含めて500字程度とし、学部・回生・氏名・学生番号・連絡先(電話番号またはメールアドレス)も明記して、730tsushin@mail2.adm.kyoto-u.ac.jpにお送りください。

ただし、お送りいただいた原稿のすべてを掲載できない場合がありますのであらかじめご了承ください。

掲載時には紹介者の学部・回生のみを掲載し、氏名は掲載しません。

なお、掲載に際して不適切な表現等がある場合は、編集部にて削除・訂正する場合があります。